1.4 噴火準備期における伊豆大島の相対精密重力測定

噴火準備期における伊豆大島の相対精密重力測定

高木朗充*・福井敬一・山里 平(気象研究所地震火山研究部) 藤原健治**(大阪管区気象台) 加治屋秋実**(大島測候所) *現所属:文部科学省研究開発局地震・防災研究課 **現所属:気象庁地震火山部火山課

Relative Precise Gravity Survey at Izu-Oshima Volcano in the Eruption Preparation Period

by

Akimichi Takagi^{1*}, Keiichi Fukui¹, Hitoshi Yamasato¹, Kenji Fujiwara^{2**} and Akimi Kajiya^{3**}

1. Seismology and Volcanology Research Department, Meteorological Research Institute, Tsukuba, Japan 2. Osaka District Meteorological Observatory, Osaka, Japan

3. Oshima Weather Station, Oshima, Tokyo, Japan

*Present affiliation: Earthquake and Disaster-Reduction Research Division, Research and Development Bureau,

Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology, Tokyo, Japan

**Present affiliation: Volcanological Division, Seismological and Volcanological Department,

Japan Meteorological Agency, Tokyo, Japan

(Received August 7, 2009; Accepted March 5, 2010; Published September 2, 2010)

Abstract

In order to investigate the magma accumulation process of Izu-Oshima Volcano in the eruption preparation period, we conducted 14 relative microgravity surveys from 2004 to 2009. The gravity changes tend to decrease near the northern margin of the summit caldera, and rates of negative gravity changes reached as much as 0.015 mgal/year. Assuming the Mogi model, we estimated the pressure increase at a depth of 3.65 km with increasing volume of 7.6×10^6 m³/year, which could account for the observed data. However, the uplift rate calculated with the estimated increasing volume would be five times as large as the observed uplift rate by the GPS network, so these estimated parameters cannot explain both gravity changes and uplift changes simultaneously.

Izu-Oshima Island could be a volcano having an extraordinary magma accumulation system that cannot be expressed as a simple physical model. More accurate microgravity survey with the uplift observation should be conducted in the future to clarify the magma accumulation system of this complicated volcano.

1. はじめに

重力観測によって火山活動に伴う変化が捉えられた という報告は、例えばエトナ、マヨン、三宅島など数 多い(山本・他, 1998; 古屋・他, 2001; Jentzsch *et al.*, 2001; 大島・他, 2003; Jousset *et al.*, 2003; Carbone *et al.*, 2007等)。地表における重力変化は、地下の密度構造 の変化や質量の移動に伴って生じる。このため噴火活 動に伴うマグマの移動や大規模な構造変化が生じた場 合、地表では重力変化が観測される場合がある。上述 の重力変化の報告例の多くは、噴火活動前後に観測さ れている。しかし噴火活動期をはさむ噴火準備期には 顕著な重力変化は観測されないものの、火山体直下で マグマの蓄積が行われている場合には、地下の密度構 造はわずかながら変化するため、精密な重力測定を継 続すればこれを検知できるはずである。

伊豆大島火山は20世紀以降これまで約30年間隔で

Corresponding author: Akimichi Takagi

Earthquake and Disaster-Reduction Research Division, Research and Development Bureau, Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology – Japan E-mail: atakagi@mext.go.jp

^{© 2010} by the Japan Meteorological Agency / Meteorological Research Institute

A. Takagi et al.

2

Vol. 61

ほぼ周期的に噴火活動を繰り返してきた(川辺, 1991 等)。前回 1986年の噴火後も地下ではマグマ蓄積が継 続していると考えられ、このことは地殻変動観測から も定量的に評価されている(高木・他, 2008)。我々は、 重力変化からマグマ蓄積過程を検知する目的で、2004 年から精密相対重力観測を開始した。これまでの5年 間で14回の観測が実施されたので、ここまでのデータ のとりまとめを行い、明らかになったことを報告する。

2. 観測

2.1 観測点

伊豆大島では、国土地理院(GSI)が一等重力点と 水準点を整備し、数年に1回重力測定を実施している。 また東京大学地震研究所(ERI)も島内に水準点網を構 築している。1986年の噴火活動前後にこれらの測点で 重力観測が実施され、大久保・他(1988)は噴火前後 で数十~マイナス数+μgalの変化が生じたことを報告 している。また、著者のひとりもこれらの測点におい て別に観測を行い、-100μgal~+50μgalの変化を報 告している(小泉・他, 1988)。

我々は、過去の観測成果を参照することができるよ う、これまでの観測成果と同様に国土地理院の重力点 及び水準点、東京大学地震研究所の基準点を引き続き 利用することとし、これに加え、国土地理院の電子 基準点、気象庁(JMA)および気象研究所(MRI)の GPS 観測点での重力観測も新たに加えた。重力変化量 の適切な推定には、測点において上下変動を把握する 必要があるが、これらの点では水準観測や GPS 観測に より地殻変動観測が実施されているため、推定のため の補正に利用が可能である。

Fig.1に観測点配置を示す。白い丸(〇)は元町の大 島測候所地震計室の基台に据え付けられた一等重力点 FGS を示す。重力測定はここを固定点として行った。 黒色の丸(●)、四角形(■)、三角形(▲) はそれぞ れ、国土地理院の水準点及び電子基準点、東京大学の 基準点、気象研究所及び気象庁の GPS 観測点を示す。 5年間の観測期間中に測点の亡失、あるいは観測点の 移設等により観測を中止あるいは休止した点がある。 これらはシンボルと観測点名を小さく標記した。Table 1に観測点の座標等の詳細を示す。ここに観測点移設 に伴う観測点名の変更についても記す。気象研究所の GPS 観測点は繰り返し観測から連続観測点に順次移行 したことに伴い、重力測定点も8点で移設が必要となっ た。これにより中止あるいは休止した観測点名の最後 には添え字oを加えた。のべ51の観測点で測定を実施 したが、現在実施している点は38点である。Table 1中、 星印を添えた測点が現在中止または休止したものであ る。

なお、1986年噴火後の1992年に大島測候所が津倍 付から元町家の上に移設したことに伴い、一等重力点 FGSも同様に移設された。これまで、移設前のFGSを 固定点にした観測に基づく多くの報告がなされている が、本報告は移設後のFGSを固定点にしたものである。



Fig. 1 Distribution of the gravity stations on Izu-Oshima Island. The large open circle denotes a reference station of the microgravity survey. This station is named FGS and is a first-order gravity station installed by the Geographical Survey Institute of Japan (GSI). Solid circles denote bench marks and GPS-based control stations (GSI). Solid squares indicate bench marks installed by the Earthquake Research Institute, Tokyo University (ERI). Solid triangles denote GPS stations installed by the Meteorological Research Institute and the Japan Meteorological Agency (MRI–JMA). Topographical contour interval is 100 m.

2.2 重力計

重力観測における測定精度は、重力計を同時に複数 台使用することで向上させることが可能である。我々 は LaCoste & Romberg D-type #109(以下、D109)、Scintrex CG-3M #454(以下、CG3)、及び Scintrex CG5 #033 (以下、CG5)の3台の相対重力計を使用した(ただし 2008年2月までは前者の2台のみ)。このうちD109は 著者のひとりが1985~1988年に伊豆大島の重力測定に 使用したものである(小泉・他,1988)。CG3及び CG5 はサーボ機構を採用した自動重力計である。D109は測 定分解能が1桁高い(0.1 µgal)が、繊細な機械式重力 計であるため精度を高めるために、取り扱いには小泉・ 他(1988)とほぼ同様に、様々な細心の注意を払った。 測定は期間を通して高木が行った。なお、重力固定点 FGSでダイヤル値を175.0にリセットして行った。

2.3 測定

測定は複数台の重力計で同時に行った。自動重力計 のCG3 とCG5 は1秒サンプリングで60回測定を3セッ ト(各セットの間隔は30秒)実施した。測定ルートは

Relative Precise Gravity Survey at Izu-Oshima Volcano in the Eruption Preparation Period

Table 1 Description of gravity stations. Stations with an asterisk are currently unused.

Site	L (deg	atituo min	le sec)	I (deg	ongit min	ude sec)	Altitude (m)	Note
GSI-FGS	34	45	0.0	139	21	48.0	76.0	大鳥測候所 大鳥一等重力点
GSI-GOJINKACHAYA*	34	44	16.3	139	22	48.3	557	御神火茶屋
GSI-10210	34	47	1.0	139	23	31.0	80.2	岡田川の道、二等水準点
GSI-10212	34	47	8.0	139	24	40.8	24.7	泉津秋之原、二等水準点
GSI-10214*	34	45	47.0	139	26	1.0	78.6	泉津福重、二等水準点
GSI-10217	34	44	26.1	139	26	4.4	348.7	泉津原野,二等水準点
GSI-10220	34	42	32.3	139	26	11.3	321.7	差木地余川. 二等水準点
GSI-10224*	34	41	11.3	139	26	8.4	69.3	差木地沖ノ根. 二等水準点
GSI-10226	34	41	5.5	139	24	14.5	29.5	差木地ゴーノー、二等水準点
GSI-10228*	34	42	2.1	139	22	39.4	58.7	野増上山. 二等水準点
GSI-10231*	34	43	48.2	139	21	14.5	13.5	野増.二等水準点
GSI-10233	34	45	28.2	139	21	28.0	40.9	元町馬の背.二等水準点
GSI-93051	34	47	4.2	139	22	52.6	97.4	岡田長坂. 電子基準点「大島1」
GSI-93055	34	41	12.0	139	26	0.5	75.9	差木地沖ノ根. 電子基準点「大島2」
GSI-960594	34	45	41.2	139	26	2.5	100.8	泉津津福重. 電子基準点「大島3」
GSI-960595	34	44	15.4	139	21	30.9	46.9	元町下高洞. 電子基準点「大島4」
ERI-ONSENHOTEL	34	45	12.8	139	24	10.5	498.4	温泉ホテル
ERI-01003	34	45	27.5	139	23	39.3	440.5	湯場
ERI-O1004	34	45	37.0	139	23	0.0	300.2	大丸山
ERI-MK*	34	43	44.4	139	23	27.5	672.0	三原山火口縁
MRI-G01	34	46	54.0	139	21	18.2	19	「北の山」 GPS連続点. 2009/2からG01oを変更.
MRI-G01o*	34	46	42.9	139	21	16.0	25	「飛行場南」 GPS繰り返し点
MRI-G02	34	46	28.5	139	24	9.0	224	「BT点」、GPS連続点、2005/3からG02oを変更、
MRI-G02o*	34	46	9.9	139	24	15.5	270	「峠貯水池」 GPS繰り返し点
MRI-G03	34	45	58.7	139	22	26.9	188	「旧測候所」. GPS連続点(JMA)
MRI-G04	34	44	50.1	139	26	0.0	328	「奥山砂漠」 GPS繰り返し点
MRI-G05	34	44	39.4	139	24	19.6	481	「裏砂漠北東」、GPS連続点. 2008/7からG05oを変更.
MRI-G05o*	34	44	39.8	139	24	19.1	480	「裏砂漠北東」 GPS繰り返し点
MRI-G07	34	44	16.7	139	22	49.7	558	「御神火茶屋」. GPS連続点(JMA)
MRI-G09	34	44	21.7	139	25	12.7	439	「裏砂漠東」、GPS連続点. 2008/7からG09oを変更.
MRI-G09o*	34	44	22.6	139	25	10.0	437	「裏砂漠東」. GPS繰り返し点
MRI-G10	34	44	7.6	139	24	20.4	535	「櫛形山北」. GPS連続点
MRI-G11	34	43	15.4	139	25	40.2	403	「差木地検知網」 GPS連続点
MRI-G12	34	43	15.0	139	24	25.0	686	「白石山」. GPS連続点. 2008/7からG12oを変更.
MRI-G120*	34	43	19.3	139	24	28.3	662	「白石山」. GPS繰り返し点
MRI-G13	34	42	27.2	139	22	52.5	180	「間伏林道」. GPS繰り返し点
MRI-G14	34	42	45.3	139	24	46.4	615	「二子山VORTAC」、GPS連続点、2007/7からG14oを変更.
MRI-G140*	34	42	27.9	139	25	6.6	415	「二子山」 GPS繰り返し点
MRI-G15	34	42	7.9	139	22	11.9	32	「野増」。GPS連続点
MRI-G16	34	42	8.3	139	26	35.2	37	「筆島」、GPS繰り返し点
MRI-G17	34	41	12.0	139	25	26.7	42	「差木地」、GPS連続点(JMA)
MRI-G18	34	44	46.5	139	23	30.8	555	「鎧端」 GPS連続点
MRI-G19	34	44	10.1	139	23	12.7	553	「A点」.GPS連続点.2005/10からG19oを変更.
MRI-G190*	34	44	11.9	139	23	10.8	548	「 表 が よ 、 GPS繰り返し点 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、
MRI-G20	34	43	41.0	139	23	24.8	675	三原神社]. GPS連続点. 2009/2からERI-MKを変更.
MRI-G21	34	43	31.2	139	23	27.9	703	「三原新山」、GPS連続点
MRI-G22	34	43	27.6	139	23	45.1	702	「三原火孔南」、GPS連続点
MRI-G23	34	43	41.7	139	23	57.4	733	
MRI-G24	34	44	21.9	139	23	46.5	531	「B火山東」 GPS連続点
MRI-G25	34	44	18.5	139	22	52.1	557	御神火展望台」 GPS繰り返し点
MIKI-G26	34	47	21.9	139	23	28.8	3.3	「阿田港」 GPS連続点

FGS を基点とする往復相対測定とした。測定ルートは 島の海岸沿いと内陸に分けて行った。

海岸沿いの測定のうち、北岸ルートは大島西部の FGSを基点とし、主に海岸沿いを通る都道208号線沿 いに岡田を経由し、大島東部で折り返す。南岸ルート も同様に波浮を経由し大島東部で折り返す。折返し点 は観測開始当初からしばらくは固定されていなかった が、島の南東部の二子山(G14)にGPS、自動光波測 距装置等の地殻変動観測のための局舎を設営したため、 2007年7月以降はG14を北岸ルート及び南岸ルートの 折返し定点とした。

内陸部の測定はFGSを起点とし、都道207号線でカ

ルデラ外輪北部まで登り、カルデラ内及び三原山経由 で御神火茶屋に至るルートである。都道207号線のカ ルデラ外輪北部までの登山ルート沿いの測点は、大久 保・他(1988)や小泉・他(1988)によって1986年噴 火前後の観測結果が報告され重要な位置づけにある(例 えば、O1004、O1003、ONSENHOTEL等)。内陸ルー トは測点数が多いという理由もあり、2006年7月以降 は、登山ルートとカルデラルートに分けて実施した。 折返し点はともに GOJINKACHAYA であったが、ここ での測定が困難となったため、2008年11月からはこ の近傍のG07に変更した。

これまで14回行った観測の履歴をTable2に示す。

A. Takagi et al.

Table 2 History of microgravity surveys.

Date	Route	Number of stations	Turning point	Instrument	Observer
2004/3/30	Southern coast	11	10220	D109, CG3	A.Takagi, K.Fukui
2004/3/31	Inland	12	GOJINKACHAYA	D109, CG3	A.Takagi, K.Fukui
2004/4/1	Northern coast	9	10220	D109, CG3	A.Takagi, K.Fukui
2004/7/27	Southern coast	16	GOJINKACHAYA	D109, CG3	A.Takagi, K.Fujiwara, T.Yamamoto
2004/7/28	Circuit along the coast	10		D109, CG3	A.Takagi, K.Fujiwara, T.Yamamoto
2004/11/9	Inland	13	GOJINKACHAYA	D109, CG3	A.Takagi, K.Fujiwara
2004/11/10	Southern coast	14	G04	D109, CG3	A.Takagi, K.Fujiwara
2004/11/11	Northern coast	7	G04	D109, CG3	A.Takagi, K.Fujiwara
2005/3/9	Northern coast	8	G09	D109, CG3	A.Takagi, K.Fujiwara
2005/3/10	Inland	9	GOJINKACHAYA	D109, CG3	A.Takagi, K.Fujiwara
2005/3/11	Southern coast	4	G16	D109, CG3	A.Takagi, K.Fujiwara
2005/10/25	Inland	8	GOJINKACHAYA	D109, CG3	A.Takagi, K.Fukui
2005/10/26	Southern coast	9	G11	D109, CG3	A.Takagi, K.Fukui
2005/10/27	Northern coast	10	G11	D109, CG3	A.Takagi, K.Fukui
2006/7/11	Northern coast	5	G04	D109, CG3	A.Takagi, H.Yamasato, H.Kuroki
2006/7/12	Southern coast	10	G04	D109, CG3	A.Takagi, H.Yamasato, H.Kuroki
2006/7/13	Climbing	11	GOJINKACHAYA	D109, CG3	A.Takagi, H.Yamasato, H.Kuroki
2006/7/14	Caldera area	6	GOJINKACHAYA	D109, CG3	A.Takagı, H.Yamasato
2007/3/16	Northern coast	7	960594	D109, CG3	A.Takagi, K.Fukui
2007/3/19	Southern coast	13	960594	D109, CG3	A.Takagi, T.Sakai
2007/3/22	Caldera area	7	GOJINKACHAYA	D109, CG3	A.Takagi, T.Sakai
2007/7/23	Climbing	6	GOJINKACHAYA	D109, CG3	A.Takagi, S.Ando
2007/7/24	Southern coast	12	G14	D109, CG3	A.Takagi, S.Ando
2007/7/25	Caldera area	8	GOJINKACHAYA	D109, CG3	A.Takagi, S.Ando
2007/7/26	Northern coast	10	G14	D109, CG3	A.Takagi, S.Ando
2007/12/11	Southern coast	7	G14	D109, CG3	A.Takagi, K.Fukui
2007/12/16	Northern coast	11	G14	CG3	A.Takagi, K.Fukui
2007/12/19	Climbing	7	GOJINKACHAYA	D109, CG3	A.Takagi, K.Fukui
2008/2/24	Southern coast	9	G14	D109, CG3	A.Takagi, H.Yamasato
2008/2/25	Northern coast	7	G14	D109, CG3	A.Takagi, H.Yamasato
2008/2/26	Climbing	8	GOJINKACHAYA	CG3	A.Takagi, H.Yamasato
2008/7/25	Caldera area	7	GOJINKACHAYA	D109, CG3, CG5	A.Takagi, H.Yamasato
2008/7/26	Southern coast	8	G14	D109, CG3, CG5	A.Takagi, H.Yamasato
2008/7/27	Northern coast	8	G14	D109, CG3, CG5	A.Takagi, H.Yamasato
2008/7/28	Climbing	8	GUJINKACHAYA	D109, CG3, CG5	A.Takagi, H.Yamasato
2008/11/13	Southern coast	8	G14	D109, CG3, CG5	A.Takagi, K.Fukui
2008/11/14	Caldera area	8	G07 C14	D109, CG3, CG5	A.Takagi, K.Fukui
2008/11/15	Northern coast	10	G14 C07	D109, CG3, CG5	A. Iakagi, K.Fukui
2008/11/16	Cimining	I	GU <i>1</i>	109, UG3, UG5	A. 18Kagi, K. FUKUl
2009/2/20	Special round trips	3	G01	D109, CG3, CG5	A.Takagi, S.Ando
2009/2/21	Mit.Minara	0	GU7 C07	D109, CG3, CG5	A. 1akagi, S.Ando
2009/2/22 2009/2/22	Northern coast	0 6	G14	D109 CG5	A Takagi, S Ando
2009/2/24	Inland	8	G07	D109, CG3 CG5	A Takagi, K Fukui S Ando
2009/2/26	Climbing	6	G14	D109, CG3, CG5	A.Takagi, K.Fukui, S.Ando
2009/6/21	Mt.Mihara	7	G07	D109, CG3, CG5	A.Takagi, K.Fukui, T.Shimbori
2009/6/22	Southern coast	8	G14	D109, CG3	A.Takagi, K.Fukui, T.Shimbori
2009/6/23	Northern coast	8	G14	D109, CG5	A.Takagi, K.Fukui, T.Shimbori
2009/6/26	Caldera area	9	G07	D109, CG5	A.Takagi, K.Fukui, T.Shimbori



Fig. 2 Measuring microgravity with gravity meters at G22 on Mt. Miharayama, on January 14, 2006.

測点数は4ルートとも10点程度である。各ルートにお ける測定数には起点と折返し点も含む。天候等の状況 により復路に測定ができなかった測点の数も含まれて いるが、解析処理には往路、復路とも測定した点のみ を使用した。

なお、大島測候所の廃止が 2009 年 10 月に予定され ており、固定点としていた FGS が廃点となる可能性 が生じたため、代替点の候補として 960595 を選定し、 2008 年 11 月からは起点測定を FGS と 960595 の両点で 行った。

各測点では、重力測定値の補正に使用するための機 械高(基準点からの高さ)、大気圧を測定した。Fig. 2 に測定風景の写真を示す。

3. 測定結果

最終的な相対重力値を算出するために使用するデー タの条件は、2台以上の重力計による、往復測定値が あるものとし、それ以外は除外した。次に測定値に機 械高補正、気圧補正、潮汐補正、ドリフト補正、及び 降水補正を行った。機械高補正はそれぞれの重力計に 対して測定した機械高にフリーエアー勾配(-0.3086 mgal/m)を乗じた値を差し引いた。気圧補正は、測点 で計測した現地気圧と標準気圧 1013.25(hPa) との相 対差に補正係数-0.0003 (mgal/hPa) を乗じた値を差 し引いた。潮汐補正は固体潮汐と海洋潮汐を計算する プログラム GOTIC2 (Matsumoto et al., 2001) を用い た。1066A 地球モデル(大久保・遠藤, 1983) に基づく Green 関数を選択し、Tamura (1982) のポテンシャルを 考慮し、50mメッシュで計算した。降水の重力に及ぼ す影響は、渡辺・他(1990)が拡散モデルによる手法 を提案している。渡辺・他(1990)は、1987~1989年 の13回の重力測定値を用い、伊豆大島を直径10kmの 円盤に近似し、その周辺で水位ゼロという境界条件の 下で最適の拡散係数を求めた。小論においても、それ と同じ拡散係数 0.2 m²/sec を用い、同様に降水の重力に

及ぼす影響を補正した。なお、日降水量は大島測候所 (FGS)のデータを用いた。

以上の補正処理後、バネ振り子に起因するドリフト 補正を行った。往路と復路の重力測定値の差を測定間 隔の時間に対してプロットし、そのドリフト勾配を最 小自乗法で求めた。往復の測定時間中はこのドリフト 係数で重力値が直線的に変化していると仮定してドリ フト補正を行う。しかし、運搬時あるいはケースの出 し入れの際の重力計に与えられたショックによるテア (データのとび)があると、このドリフト勾配は直線に のらない。直線から大きくはずれた場合にはドリフト 補正することが困難である。近似直線の R-2 乗値が概 ね0.75 より小さい場合のデータは採用しないこととし た。

これらの処理を施した後、2 台以上のデータがある場 合の FGS を固定点とする相対重力値の単純平均を各点 の最終重力値とした。Fig. 3 に最終重力値が 2 回以上存 在する 42 地点の最終重力値の時系列図を示す。測定精 度の目安を、往路と復路の測定値の平均値からの較差 と、複数台の重力計による測定値の標準偏差の和とし、 Fig. 3 のエラーバーに示した。

なお、自動重力計では測定時間中の重力値の標準偏 差も自動的に算出される。60秒×3回の測定で得られ た標準偏差の平均は0.02~0.2 mgalの範囲に収まるこ とが多いが、時に0.4 mgalにも達するときがあった。 これは大島が海洋上にあるため強い波浪のある時に測 定した場合には、重力値に大きなノイズとして重畳す るからである。内陸の観測点は比較的波浪ノイズは少 ないが(例えば、G18、G24、G25等)、海岸沿い、と りわけ外洋に面した南西海岸沿いの波浪ノイズは、定 常的に大きかった(例えば、93055、G15、G17等)。

Fig.3を見ると、測点によっては明らかな重力値の経 年変化を示す観測点があることに気づく。より適切な 評価を行うために、最終値が3年以上にわたってのべ 5回以上存在する22測点を選び、うち18測点を示し たものが Fig. 4 である。局地的に顕著な地殻変動が知 られている三原新山周辺の測点4点(G05、G22、G24、 G25) は除外した。最終重力値を時間に対して線形近 似した直線と、その変化速度及び推定量の1σの標準 偏差も示した。データのばらつきも大きくデータ数も 十分とはいえない測点もあるが、5年という短期間に おいて経年変化が見て取れる測点もある。その特徴は、 内陸のカルデラ北部周辺の測点ほど重力値は減少し (ONSENHOTEL、O1003、O1004 等)、そこから離れる 測点ほど増大する(G01o、93055 等)。重力値は地殻変 動により隆起することで減少する。よってこの結果は、 一次近似的にはカルデラ北部周辺が相対的に隆起して いることを示しているのかもしれない。これらの結果 を Table 3 に示す。

4. 圧力源推定

地殻変動観測によって伊豆大島では経年的な膨張が 観測されている(高木・他, 2008)。変動パターンは時 6

mgal GSI-GOJINKACHA -110.85 -110.90 -110.95 <u>ه</u> ک -111.00 Ŷ -111.05 -111.10 2004 2005 2006 2007 2008 2009 mga **GSI-10210** 7.55 7.50 7.45 7.40 Ŧ 7.35 7.30 2004 2005 2006 2007 2008 2009 mgal **GSI-10212** 17.80 17.75 ٥ 17.70 ₹ 17.65 17.60 17.55 2004 2005 2006 2007 2008 2009 mgal GSI-10217 -56.70 -56.75 -56.80 ₹ ₹¢ -56.85 -56.90 -56.95 2004 2005 2006 2007 2008 2009 mgal GSI-10220 -53.50 -53.55 -53,60 ΣŢ -53.65 -53.70 -53.75 2004 2005 2006 2007 2008 2009 mgal **GSI-10226** -1.70 -1.75 <u>र</u> -1.80 -1.85 -1.90 -1.95 2004 2005 2006 2007 2008 2009 mgal GSI-10233 7.45 7.40 7.35 ¢ 7.30 7.25 7.20 2004 2005 2006 2007 2008 2009 mgal ^{3.50} 1 GSI-93051 3.45 3.40 3.35 3.30 3.25 2004 2005 2006 2007 2008 2009 GSI-93055 -1.75 ¢ [‡] ₹¢ -1.80 ᢐ -1.85 -1.90 -1.95 2004 2005 2006 2007 2008 2009 mgal GSI-960594 -1.30 -1.35 रु -1.40 -1.45 -1.50 -1.55 2004 2005 2006 2007 2008 2009 mgal GSI-960595 6.00 5 95 5.90 <u>, *I * I≠8</u>≩ Ŧ 5.85 5.80

5.75 2004 2005 2006 2007 2008 2009

A. Takagi et al. mgal ERI-ONSENHOTEL -87.95 -88.00 -88.05 ĮΣ -88.10 -88.15 2004 2005 2006 2007 2008 2009 mgal ERI-01003 -76.80 -76.85 -76.90 -76.95 ¢₹ -77.00 -77.05 2004 2005 2006 2007 2008 2009 mgal ERI-01004 -45.10 ठ ♦ 2 ♦1 45.15 -45.20 -45.25 45.30 2004 2005 2006 2007 2008 2009 mgal **ERI-MK** -137.70 -137.75 -137.80 -137.85 ₹ -137.90 2004 2005 2006 2007 2008 2009 mgal MRI-G01o <u>x</u> × × 12.15 12.10 12.05 12.00 11.95 2004 2005 2006 2007 2008 2009 mgal MRI-G02 -23.85 -23.90 ₹ ◆ I◆ -23.95 -24.00 -24.05 24.10 2004 2005 2006 2007 2008 2009 mgal MRI-G020 -34.80 ł -34.85 ₹ -34.90 -34.95 -35.00 2004 2005 2006 2007 2008 2009 mgal -^{21.40} 1 **MRI-G03** 21.45 21.50 -21.55 -21.60 -21.65 2004 2005 2006 2007 2008 2009 mgal -^{51.45} MRI-G04 -51.50 ¤ ⊽ ¢∑ 51.55 -51.60 51.65

-51.70 2004 2005 2006 2007 2008 2009

mga	al	М	RI-	G0	5		
/9.05 •							
/9.10 •							î
/9.15 •						. Ţ	+
79.20 •						-1	
79.25 -							
79.30 -	-				-		_

2004 2005 2006 2007 2008 2009

mga	al	MRI-G05o
-78.70		
-78.75		<u>⊼ ₹</u>
-78.80	Ť	
-78.90		
	- 2004	2005 2006 2007 2008 2009

Fig. 3 Gravity changes of all stations referenced to FGS.

mgal	MRI-G07
-112.65	
-112.70	
-112.75 -	
-112.80	2a 4
-112.85	**1
-112.90 🕂	· · · · ·
20	04 2005 2006 2007 2008 2009
	MRI-G09
-73.00	
-73.05 -	
-73.10	
-73.15 -	т
-73.20 -	<u>a l</u>
-73.25 +	
200	4 2005 2006 2007 2008 2009
mgal	MRI-G09o
-72.45	
-72.50 -	-
-72.55 -	27 x
-72.60 -	- 1 ¢
-72.65 -	
-72.70 +	
200	04 2005 2006 2007 2008 2009
maal	

-98.75 -M -98.80 -98.85 -98 90 ľ -98.95 -99.00

2004 200

mgal	MRI-G11
-67.10	_ [
-67.20	<u>↓ I ↔ ₹</u> <u>I</u> ↔ ₹
-67.25 -67.30	*
200	4 2005 2006 2007 2008 2009

mgal	MRI-G13	
28.55		
28.60 -		_
28.65		_
28.70	₹ * <u>*</u>	_
28.75 -	-	_
28.80		

2004 200

mg	al	MRI-G14
-130.80	H	± T
-130.85 -130.90	1	
-130.85	t	
	200	4 2005 2006 2007 2008 2009

mgal M

-79.50	_	रु		
-79.55	ł	1	₽ ¢	
-79.65			-	
70 70				

2004 200

mgal	MRI-G15
J.15 1	
0.10 -	т
0.05	4
J.05	≠ <u>₹</u>
0.10 •	T + 2 + 7

0.00	1	î	\$		Ŧ	<u> </u>
-0.05	1					
-0.10	+					
	2004	2005	2006	2007	2008	2009

mg	ja	' I	MF	21-0	G16	;	
14.65 14.60]		т		۰. *	ł.	T
14.55	1		ł	-	×	-4	Ľ
14.50	1			Ŷ			
14.45	1						
14.40	2	004 2	2005	2006	2007 2	2008 2	009

mgal MDI C17

4 50		IVI	1-1	91			
4.50	1						
4.45	1				<u> </u>	*	-
4.40	+	-Ţ-	*	¢⊻	<u>*</u> <u>*</u>	×	-
4.35	-	1	* ¢			¢	_
4.30	-						_
4.25	-	_		_	_	-	
	2004	- 1 2005	2006	2007	- 2008	2009	9

-103.00 -103.05 -103.10 -103.15 -103.20 2004 2005 2006 2007 2008 2009 mgal **MRI-G19** -100.80 -100.85 -100.90 -100.95 -101.00 -101.05 2004 2005 2006 2007 2008 2009 mgal MRI-G21 -150.30 -150.35 -150.40 -150.45 -150.50 ¢₹ -150.55 2004 2005 2006 2007 2008 2009 MRI-G22 ₹ ¢٥ 2004 2005 2006 2007 2008 2009 MRI-G23 2004 2005 2006 2007 2008 2009

MRI-G18

mgal

-102.95

MRI-G24 ₹ ₽ *** { ত

2004 2005 2006 2007 2008 2009

mgai 13.85 =	MF	<u> </u>	<u> 325</u>	5	
13.90					
13.95 -	т		र	ş	*
14.00 -	ΣÎ		1		· ·
14.05 -					
14.10					

2004 2005 2006 2007 2008 2009

mgal	MRLG26	
4.65 🔒		Ŧ
4.60 -	- <u>z ź -</u> *	_î¢ _≠]
4.55	<u>\$</u> <u>₹</u>	÷1
4.50 -		
4.45 -		
4.40		

2004 2005 2006 2007 2008 2009

Vol 61

RI-G10	mga -157.10
	-157.15 -
7 T	-157.20 -
⊻ î₀ ₹	-157.30
	-157.35 -
05 2006 2007 2008 2009	2
RI-G11	mga
T	-156.45
<u>+</u>	-156.55
⊥ [∞] ↓ [♀] _{₹∞∞} ∞	-156.60 -
\$ <u></u>	-156.65 -
	-156.70 -
05 2006 2007 2008 2009	2
RI-G13	mga
	-97.70
	-97.80 -
* * · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	-97.85 -
· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	-97.90 -
· · · · ·	-97.85 -
05 2006 2007 2008 2009	2
RI-G14	mga
<u> </u>	-113.85 •
T ≅ ∓≂₹T	-113.90 -
Υ [™] τ ¹	-114.00
	-114.05 -
	-114.10 -
5 2006 2007 2008 2009	2
RI-G14o	mga 24.65
	24.60 -
<u>*</u>	24.55 -
<u> </u>	24.50 -
	24.45 •
5 2006 2007 2008 2000	24.40
3 2008 2007 2008 2009	2
RI-G15	
I	
1 * 2 * ₇ 2	
¢ ^Y 2	
· · · · ·	
5 2006 2007 2008 2009	
RI-G16	
<u> </u>	
ž	

気象研究所技術報告 第69号 2013

Relative Precise Gravity Survey at Izu-Oshima Volcano in the Eruption Preparation Period

2010



Fig. 4 Averaged gravity change rates with Std. Error (1σ) at the major stations except stations on and around Mt. Miharayama, referenced to FGS.

間空間的に複雑であり、これを単純なモデルで説明す ることは困難であるが、等方的な膨張性の変動から一 次近似的には球状圧力源を仮定することで問題はない。 そこで、以下、伊豆大島の変動を単一の球状圧力源で 生じたものと仮定して解析する。

一般に地下で周辺密度と異なる物質が充填された時、地表面では地殻変動が観測されるとともに、重力変化も観測される。萩原(1977)は茂木モデル(Mogi, 1958)を基に、球状圧力源により弾性体の地表で生じ

る重力変化の理論式を示した。

- 重力変化 δg は、以下の 4 つの成分の総和からなる。
- 測点が隆起することによって変化するフリーエアー の成分 δf
- 2. 密度の異なる球の体積変化による成分 δg₀
- 3. 隆起した質量による成分 δg_1

いま万有引力定数をG (= 6.67 × 10⁻¹¹ m³ kg⁻¹ s⁻²)、フ

A. Takagi et al.

Table 3 Averaged gravity change rates with Std. Error (1o) at the major stations except stations on and around Mt. Miharayama, referenced to FGS.

Site	Initial survey	Last survey	Total number of measurements	Averaged gravity changes with Std. Error (1σ) [mgal/Year]
GSI-FGS	2004/3/31	2009/ 6/26	96	0.0000
GSI-GOJINKACHAYA	2004/3/31	2008/ 7/28	11	-0.0057 ± 0.0117
GSI-93051	2005/3/9	2009/6/23	7	-0.0021 ± 0.0041
GSI-93055	2005/10/26	2009/ 2/26	7	0.0097 ± 0.0073
GSI-960594	2004/11/11	2009/ 6/23	11	-0.0019 ± 0.0029
GSI-960595	2005/10/26	2009/ 6/26	14	-0.0004 ± 0.0035
ERI-ONSENHOTEL	2005/10/25	2009/6/21	10	-0.0152 ± 0.0055
ERI-01003	2004/7/27	2009/6/21	7	-0.0086 ± 0.0061
ERI-O1004	2004/7/27	2009/ 2/24	5	-0.0067 ± 0.0026
MRI-G010	2004/11/11	2009/ 2/20	5	0.0053 ± 0.0034
MRI-G02	2005/10/27	2008/11/15	5	-0.0150 ± 0.0078
MRI-G03	2004/11/9	2009/6/21	8	-0.0061 ± 0.0043
MRI-G04	2004/11/10	2009/ 2/22	8	-0.0050 ± 0.0059
MRI-G11	2004/11/10	2009/6/23	11	-0.0101 ± 0.0062
MRI-G15	2005/3/11	2009/ 2/26	9	-0.0004 ± 0.0074
MRI-G16	2005/3/11	2009/6/23	7	0.0105 ± 0.0080
MRI-G17	2005/3/11	2009/ 2/26	9	0.0056 ± 0.0082
MRI-G18	2004/7/27	2009/6/21	9	-0.0128 ± 0.0071
MRI-G26	2004/11/11	2009/ 6/23	9	0.0021 ± 0.0035

リーエアー勾配を C_f (mgal/m)、球殻内部に充填された 物質の密度を ρ_0 、周辺弾性体の密度を ρ 、ラメ定数を λ 、 μ とする。地表面から深さDにある球殻が等圧膨張し、 球状圧力源の体積変化量が δV となったとき、地表面の 圧力源直上からの水平距離rにおける重力変化の成分 は、萩原(1977)からそれぞれ以下の通りに表せる。

$$\delta f = \frac{3\delta V C_f}{4\pi} \frac{D}{\left(r^2 + D^2\right)^{3/2}}$$
(1)

$$\delta g_0 = G \, \delta V(\rho_0 - \rho) \, \frac{D}{\left(r^2 + D^2\right)^{3/2}} \tag{2}$$

$$\delta g_{\rm l} = \frac{G \,\delta V \rho(\lambda + 2\mu)}{\lambda + \mu} \frac{D}{\left(r^2 + D^2\right)^{3/2}} \tag{3}$$

$$\delta g_2 = -\frac{G \,\delta V \rho \mu}{\lambda + \mu} \frac{D}{\left(r^2 + D^2\right)^{3/2}} \tag{4}$$

これらの総和 δg は以下のような簡単な形に表せる。

$$\delta g = \delta f + \delta g_0 + \delta g_1 + \delta g_2$$

$$= \left\{ \frac{3C_f \,\delta V}{4\pi} + G \,\delta V \,\rho_0 \right\} \frac{D}{\left(r^2 + D^2\right)^{3/2}} \tag{5}$$

このうち中括弧内の第1項は*δ*fに相当し、茂木ソースに基づく隆起によるフリーエアーの寄与分であり、 第2項はそれ以外の寄与分の総和である。中括弧の外の項は圧力源と測点の位置関係による減衰項を意味する。これを見てわかるように、*δg*は四つの項が地殻変動に伴うフリーエアー寄与分と球殻内の物質が体積膨張した質量に伴う重力変化の寄与分の和だけの簡単な式で表されることがわかる。

伊豆大島の変動に茂木モデルを適用し、我々が得た 18 測点の重力変化速度を式(5)にあてはめ、格子点探 索法により残差自乗和が最小になるような圧力源の緯 度、経度、深さD、体積変化量 δVの最適解を推定した。 フリーエアー勾配 C_t は-0.3086 mgal/m、球殻内の密度 ρ_0 を 2.67 × 10³ kg/m³ とした。位置の探索格子間隔は 0.05 km、体積変化量の探索格子間隔は $0.1 \times 10^6 \text{ m}^3$ /year と し、測点の標高差による補正も行った(福井・他, 2003)。 求まった圧力源パラメータは、カルデラ縁北部(34.7523 °N、139.4078°E、ONSENHOTELの南 150 m、東 450 m) の海抜下 3.65 km で、体積変化速度は 7.6 × 10⁶ m³/year であった。重力変化速度の残差の標準偏差は、0.0042 mgal/year であった。Fig.5に、圧力源の最適値として 推定された場所を星印で示す。また、各観測点の重力 変化速度に1σの標準偏差を考慮して計算される、推 定圧力源の誤算分布を黒い影の領域で示す。誤差範囲 は広く、深さは海抜下1~8kmにも及ぶが、水平位置 はカルデラ北縁部周辺であることがわかる。

Fig. 6には、圧力源の位置の他、FGS を固定とした各 測点(丸印)における重力変化速度と、圧力源から期 待される地表面における重力変化速度の面的な分布も 示した。暖色系が正、寒色系が負を示す。また、Fig. 7 には推定された圧力源からの水平距離に対する18 測点 の重力変化速度の観測値(白いシンボル)と、見積も られた圧力源パラメータから期待される計算値(黒い シンボル)を示す。局地的に顕著な地殻変動が知られ ているため解析には除外した、三原新山周辺の測点4 点(G05,G22,G24,G25)についても参考のためプロッ トした。



Fig. 5 Estimated pressure source based on the Mogi model using gravity change rates referenced to FGS. An asterisk denotes an estimated source at a depth of 3.65 km. The shadowed and hatched area indicates the error distribution of the estimated source with 1σ standard deviation.

5. 考察

重力観測により推定された圧力源は、これまで地殻 変動観測で報告されてきている推定値(例えば、高木・ 他(2008)では深さ5km、体積変化量2×10⁶m³/year) と比べると、深さは約1km 浅く、水平位置は若干東寄 りとなったが概ね一致している。しかし、体積変化量7.6 ×10⁶m³/year は過大見積もりされており、深さとのト レードオフもあるが4倍程度大きい。重力観測による 茂木モデルを仮定した圧力源推定値は、式(5)を見ても わかるように、括弧内の第1項の上下変動によるフリー エアーの寄与に大きく支配される。たとえば、括弧内 第2項の球殻内密度の寄与に比べると、第1項の寄与 はその-4倍以上となる(式(6))。

$$\frac{\delta f}{(\delta g_0 + \delta g_1 + \delta g_2)} = \frac{3C_f \delta V}{4\pi} / G \delta V \rho_0 = \frac{3C_f}{4\pi G \rho_0} = -4.13$$
(6)

このことは、若干正確さを欠く表現ではあるが、「マグ マが地下の球殻内に充填されることによって観測され る重力の増加量よりも、膨張して地表面が隆起するこ とによる重力の減少量の方が4倍以上大きい」ことを 意味する。

FGS(大島測候所)では GPS 連続観測を実施している。また推定圧力源に最も近い ONSENHOTEL におい



Fig. 6 Estimated pressure source based on the Mogi model using gravity change rates referenced to FGS. An asterisk denotes an estimated source at a depth of 3.65 km. Colored circles indicate observed gravity change rates according to the color palette. Color distribution on the land surface represents the calculated gravity change rate with estimated source parameters.



Fig. 7 Observed gravity change rates (open symbols) and calculated gravity change rates with estimated source parameters (solid symbols) including the four stations on and around Mt. Miharayama that were not used for source estimation.

ても 2007 年 3 月から GPS 観測を開始した。FGS を固 定した ONSENHOTEL の高さの相対変化を Fig. 8 に示 す。観測期間は 2 年余りにすぎないが平均的な隆起速 度は 0.021 m/year であった。推定された圧力源パラメー タを用いて ONSENHOTEL で期待される隆起速度を計

9



Fig. 8 Temporal altitude change at ONSENHOTEL station referenced to FGS by GPS observation. Averaged altitude change rate is 0.021 m/year.

算すると 0.103 m/year となり、GPS で観測された量の 約5倍という大きな量となる。仮に推定された体積変 化量が5倍程度過大見積もりされていると考えると、 δV は推定された大きさの 1/5 程度がもっともらしいと 推測される。

式(7)は式(5)の一部を変形したものである。

$$\delta g = \left\{ \frac{3C_f}{4\pi} + G\rho_0 \right\} \delta V \frac{D}{(r^2 + D^2)^{3/2}}$$
(7)

中括弧内第1項がフリーエアーの寄与項、第2項が 球殻内の密度の寄与項である。 $\delta V \varepsilon 1/5$ としたうえで、 重力観測で得られた量 $\delta g \varepsilon$ 説明することは可能であろ うか。 $\rho_0 = 2.67 \times 10^3 \text{ kg/m}^3$ の場合の括弧内の二項の比 は-4:1であった(式(6))。 $\delta V \varepsilon 1/5$ とした場合には、 その比を-4:-11とすれば式(7)の $\delta g \varepsilon$ 説明するこ とが可能になる。このことは ρ_0 の11倍の密度の物質 が消失し、しかも膨張するということになるが、これ は現実的ではない。

活動的な火山では火山性の脱ガス活動によってマグ マの質量が減少する。仮に脱ガスによって、前述の「ρ₀ の11倍の密度の物質が消失したこと」と等価なことが 地下の圧力源付近で起こっていると仮定してガスの放 出レートを計算すると、その量は4.5×10¹⁰ kg/year と なる。日換算で120,000 ton/day であり、この量は三宅 島 2000 年噴火後の最盛期の二酸化硫黄ガスの噴出レー トに匹敵する(Kazahaya *et al.*, 2004)。顕著な脱ガス活 動のあった三宅島ではそれに伴う山体の収縮を伴って いた。また伊豆大島では噴煙活動は低調であり、脱ガ スで重力データと隆起データを説明することは困難で ある。

伊豆大島では、1986 年噴火以前にも繰り返し重力観 測のいくつかの結果が報告されている。これらは、短 期間的な例外はあるものの(井上・他,1972)、おお むね経年的に内陸部の重力値は相対的に減少している という観測結果である。小泉・他(1986)によると、 1979 年から 1985 年の観測値は島の周縁に比べて内陸 部で相対的に重力値が減少していることを報告してい る。例えばカルデラ付近(本報告の GOJINKACHAYA) では 0.12 mgal もの減少が観測された。この重力変化速 度は、我々の観測結果と同程度である。ただしこれら の報告では、高さの変化についての観測成果について は触れられていない。

このように、内陸部で最大 0.015 mgal/year 程度の重 力減少は 1986 年噴火以前から現在まで継続的に見られ ているが、これに見合う隆起量は観測されていない。 このことは、伊豆大島の地殻変動や重力変化は、単一 圧力源や弾性的な振る舞いで説明するよりも別の複雑 なメカニズムで説明することを検討する必要性を示唆 する。このためには、更に精密な重力データの蓄積の 他に、高精度の高さ変化のデータ蓄積を待たなければ ならない。

6. まとめ

伊豆大島の噴火準備期におけるマグマ蓄積過程を知 るためのひとつの手段として、2004年から2009年の 間に14回の相対重力観測を実施した。その結果、カル デラ北部を中心に最大で0.015 mgal/yearの相対的な重 力値の減少が見られた。茂木モデルを仮定して圧力源 を推定したところ、海抜下3.65 kmで7.6×10⁶ m³/year の体積膨張があれば説明できることがわかった。しか し、この圧力源パラメータで期待される地表の隆起量 はGPSで観測された結果よりも5倍も大きく、重力変 化と地殻変動を同時に説明することはできない。また 圧力源球殻内の密度の設定の仕方で対応できる範囲か ら逸脱していた。

このような重力変化量分布は 1986 年噴火以前にも報 告されている。観測された重力変化分布とそれに基づ いて推定されたマグマ蓄積速度が正しいとすれば、観 測された隆起速度は蓄積速度から期待される量を説明 できない。このことは、伊豆大島は地殻変動や重力変 化を単一圧力源や弾性的な振る舞いで説明することが 困難な、マグマ蓄積過程の複雑な火山であることを示 唆するのかもしれない。これらを解明するためには、 更に精度の高い重力観測データ、及び測地データの蓄 積が今後も必要である。

謝辞

本観測では多くの方の協力を得て行われた。安藤忍 氏、坂井孝行氏、新堀敏基氏、山本哲也氏、黒木英州氏、 浅沼光輝氏には観測にご協力頂いた。また大島測候所 の多くの職員には全面的に支援して頂いた。国土地理 院には電子基準点、重力点、水準点を利用させて頂い た。東京大学地震研究所には基準点を利用させて頂い た。大島町及び大島警察署には、カルデラ内における 観測にご配慮を頂いた。また、2名の匿名の査読者の 建設的なご意見により、本稿は大きく改善された。編 集委員の林豊氏には有意義なご指摘を頂いた。ここに 記してみなさまへ感謝の意を表します。

63

11

参考文献

- Carbone, D., G. Currenti and C. Del Negro, 2007: Elastic model for the gravity and elevation changes before the 2001 eruption of Etna volcano, *Bull Volcanol*, 69, 553-562.
- 福井敬一・坂井孝行・山本哲也・藤原健治・高木朗充・中禮正明, 2003: 標高補正茂木モデルの有用性とその限界, 日本火山 学会講演予稿集, 35.
- 古屋正人・大久保修平・田中愛幸・孫 文科・渡辺秀文・及 川 純・前川徳光, 2001: 重力の時空間変化でとらえた三 宅島 2000 年火山活動におけるカルデラ形成過程, 地学雑 誌, 110, 2, 217-225.
- 萩原幸男, 1977: 伊豆半島の異常隆起を説明する茂木モデル とそれに伴う重力変化, 東京大学地震研究所彙報, 52, 301-309.
- 井内 登・加納克已・藤井陽一郎, 1972: 大島における重力変 化の研究(II), *測地学会*, **18**, 104-111.
- Jentzsch, G., R. Punongbayan, U. Schreiber, G. Seeber, C. Volksen and A. Weise, 2001: Mayon volcano, Philippines: change of monitoring strategy after microgravity and GPS measurements from 1992 to 1996, *J. Volcano. Geotherm. Res.*, **109**, 219-234.
- Jousset, P., H. Mori and H. Okada, 2003: Elastic models for the magma intrusion associated with the 2000 eruption of Usu Volcano, Hokkaido, Japan, J. Volcano. Geotherm. Res., 125, 81-106.
- 川辺禎久, 1991: 伊豆大島火山の岩石学的発達史, 火山, 36, 297-310.
- Kazahaya, K., H. Shinohara, K. Uto, M. Odai, Y. Nakahori, H. Mori, H. Iino, M. Miyashita and J. Hirabayashi, 2004: Gigantic SO₂ emission from Miyakejima volcano, Japan, caused by caldera collapse, *Geology*, **32**, 5, 425-428.
- 小泉岳司・福井敬一・橋本徹夫・干場充之・清野政明・里村幹夫,

1988: 伊豆大島における重力変化 – 1985 年 11 月~1988 年 5 月-、火山、33、291-303.

- 小泉岳司・吉田明夫・石川有三・澤田可洋・井内 登, 1986: 伊豆大島における重力測定-1985年11月-, 気象研究所研 完報告, 37, 271-280.
- Matsumoto, K., T. Sato, T. Takanezawa and M. Ooe, 2001: GOTIC2: a program for computation of oceanic tidal loading effect, *Jour. Geod. Soc. Jpn.*, 47, 243-248.
- Mogi, K., 1958: Relations between the eruptions of various volcanoes and the deformations of the ground surfaces around them, *Bull. Earthq. Res. Inst., Univ. Tokyo*, **36**, 99-134.
- 大久保修平・遠藤 猛, 1983: 荷重変形の Green 関数の偏微分 係数(演旨), *地震学会講演予稿集*, 1983, **2**, 189.
- 大久保修平・渡辺秀文・田島広一・沢田宗久・坂下至功・横 山泉・前川徳光, 1988: 1986 年伊豆大島噴火前後の重力 変化, 東京大学地震研究所彙報, **63**, 2, 131-144.
- 大島弘光・前川徳光・植木貞人・武田嘉人, 2003: 北海道の火 山およびその周辺地域における精密重力測定:北海道 駒ヶ岳,北海道大学地球物理学研究報告, 66, 101-110.
- 高木朗充・山里平・福井敬一・坂井孝行・安藤 忍・加治屋 秋実・加藤幸司, 2008: GPS 時間変化から推定する圧力源 パラメータ 伊豆大島への適用, 日本地球惑星科学連合 2008 年大会予稿集, V151-024.
- Tamura, Y., 1982: A computer program for calculating the tidegenerating force, *Publ. Int. Latit. Obs. Mizusawa*, 16, 1-20.
- 渡辺秀文・大久保修平・坂下至功, 1990: 降水の重力におよぼ す影響評価 – 拡散モデル, 日本火山学会秋季講演予稿集, 56.
- 山本圭吾・高山鉄朗・石原和弘・大島弘光・前川徳光・植木貞人・ 沢田宗久・及川 純,1998: 桜島および姶良カルデラ周 辺における重力変化, 京都大学防災研究所年報,41B-1, 153-160.

噴火準備期における伊豆大島の相対精密重力測定

高木朗充*・福井敬一・山里 平(気象研究所地震火山研究部) 藤原健治**(大阪管区気象台) 加治屋秋実**(大島測候所)

噴火準備期における伊豆大島火山のマグマ蓄積過程を明らかにするため、2004 年から 2009 年に 14 回の相対精密重力測定 がなされた。重力変化は山頂カルデラ北縁を中心に減少する傾向であり、重力減少速度は最大で 0.015 mgal/year であった。茂 木モデルを仮定して圧力源パラメータを求めると、観測データを説明できるパラメータとして、7.6 × 10⁶ m³/year の体積膨張 する海抜下 3.65 km の深さの圧力膨張源が見積もられた。しかし見積もられた体積膨張から計算される隆起速度は GPS による 観測値の 5 倍にもなり、これら見積もられた膨張源のパラメータは、重力と隆起の変化を同時には説明することはできない。 伊豆大島火山は単純な物理モデルで示すことができない複雑なマグマ蓄積系を有する火山であるのかもしれない。このよう

伊豆人島火山は単純な物理モアルビホリことができない後継なマクマ畜損未を有りる火山であるのかもしれない。このよう な複雑な火山のマグマ蓄積系を明らかにするためには、隆起量の観測とともにさらなる高精度の微小重力観測を今後も継続す る必要がある。

^{*}現所属: 文部科学省研究開発局 地震·防災研究課

^{**} 現所属: 気象庁地震火山部火山課